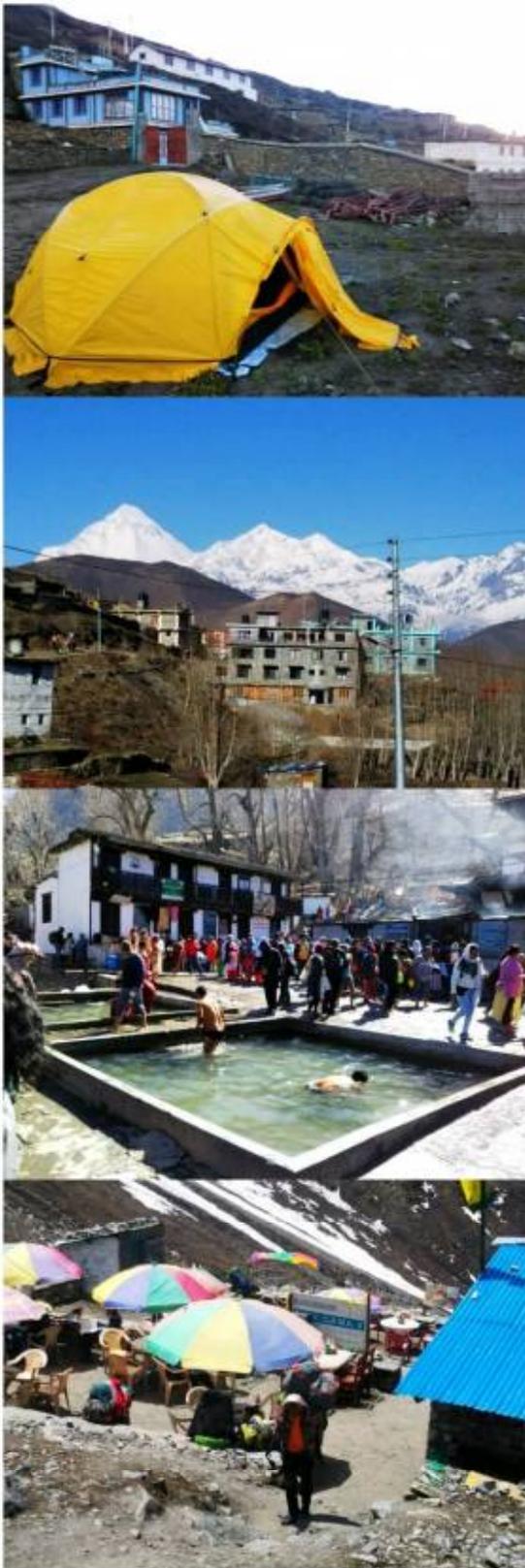


チュルー登山



ムクチナートのロッジの前に張られたテントから外に顔を出すと、ダウラギリの連山が1峰を筆頭にずらりと並んだ豪勢ななごめであった。今朝はモーニングティーから始まって洗面用のお湯のサービスと続いて朝食につながるキャラバンのお決まりのスケジュールが始まる。夜中にポーター二人が遅れて到着したので、我がパーティーは客1人に対して、ガイド及びビコックが各1人、ポーターが5人の総勢8人となった。自分1人のために、こんなに大勢の人間が付き従うのは日本では考えられないが、ヒマラヤ登山では普通のことである。ただ生活のためとは言え、外国人の遊びに尽くしてくれる人がいるからヒマラヤ登山も成り立つわけで感謝しなければならない。

出発してしばらくは大勢の巡礼客に混じって寺院の間を巡って行く。ここムクチナートはチベット仏教とヒンズー教両方の聖地なので、前者の信者はマニ車を回し、後者の信者は沐浴をするなど大にぎわいであった。寺院を抜けるとすぐにトロンパスを目指しての標高差1800メートルの急な登りが始まる。荷物の重いポーターは遅れぎみになり、ランチを作る予定のロッジでポーターの到着を待つ(ポーターが到着しないと食材が手に入らない)。昼食は野菜ラーメンとチャーハンで普段の食事量の倍近くあったが、何故か完食してしまった。食後はしばらくは動くのも億劫で、スタッフが食事の後片付けで忙しい間、休せてもらった。

食後の行動も急な登りが続くが、ポーターたちのペースは遅くて、トロンパスは越えられず、だいぶ下の方までしか行くことは

できなかった。日程には余裕があるので心配はしていないが、明日にはベースキャンプに入りたいものだ。それよりも気になったのは降りてくる人の何人かが足を引きずっていることであった。どこで怪我をしたのかと思ったら、今日のキャンプ地まで来てわかったのだが、キャンプ地の上は傾斜のある雪の斜面となっていたので、そこでスリップして怪我をしたのだろう。私も今日は運動靴で登ったが、明日は用心して登山靴を履くことにしよう。

今朝は昨日の遅れを取り戻すため暗いうちから出発する予定だったが、明るくなってもモーニングコーヒーの連絡がないので、どうしたのかと思ったら予定時間を大幅に遅れてガイドがやって来て言うには「ポーターの1人が高山病にかかって吐いてしまったので、出発が遅れている」とのこと。「ガ〜ン」である。そう言えば、39年前に同じ山に挑戦しながら、ポーターが原因で登頂できなかった悪夢(キャラバンの途中で祭りのためにポーターが集まらず、結果的に隊員に負荷がかかったことが、ハイキャンプでの高山病発症に繋がって登頂できなかった)が蘇ってきた。高山病の治療は低い場所に下ろすことが第一であり、今日はここから更に7百メートルの標高差のある峠(トロンパス)を越えることでもあり、上部で症状が悪化して1人では降りられなくなると一大事なので、そのポーターには下山してもらい、彼が運ぶ荷物は私も含めた7人で分担してはどうかと提案したが、ガイドは「本人が行きたがっている」の一点ばりなので、しばらくは荷物を担いでもらって様子を見ることにした。

昨日は運動靴で通したが、スリップ事故と思われる怪我人と多数すれ違ったので、慎重を期して登山靴に履き替える。朝のうちは雪が氷化して滑りやすくなっていたので、登山靴にしたのは正解だった。件のポーター君はスパイク付きの運動靴を履いており、他のポーターよりも遅れがちだったか、大幅な遅れにはならなかったもので、なんとかなりそうだ。

5412メートルのトロンパスは39年前にチュルー登山の帰りに今回とは反対にチュルーベースキャンプを朝出て夕方にはムクチナートに着いているので、ムクチナートからスタートしても倍の二日間で行けると思ったのが甘かった。ポーター同行だとペースが落ちることを忘れていたことと、加齢により高所での行動力が低下していることを等閑視していたことである(低酸素室は万能ではないのだ!)。峠が近づくにつれて、歩行速度が目



見えて減退していくのは嫌になってくる。それでも 12 時過ぎには着いたので、自分 1 人なら今日中にチュルーのベースキャンプに着くことは可能であったが、最後のポーター（例の高山病になったポーター）が着いたのは 2 時過ぎになったので、今日中にベースキャンプに着くことは不可能になった。まあ後は下り一方だから、なんとかポーターの職務を果たすことができるだろう。峠には二時間近くいたので、それなり

の高所順化にはなったろうし、記念写真をとったりもした。

下りだしてしばらくすると下から呼び掛ける声がある。近づいてみると、下から登ってきてムクチナートまで行こうとしていたパーティーの 1 人が高山病にかかって歩けなくなってしまったということで、助けを求めてきたものだった。下に下ろすことが先決なので、ガイドが協力して、そのパーティーの人と一緒に両側から抱き抱えて下山させたが、うちのポーターがこのようにならなくて良かったと思った。遭難救助の手助けに時間をとられたこともあり、ベースキャンプの登り口までは達せられなかったので、明日 1 日はベースキャンプまでとなり、丸 1 日行程が遅れることになるが、予備日もあるので、なんとかなるだろう。



ベースキャンプ出発の日はずまずの天気となった。頂上を目指すのはガイドと私の二人だが、高所キャンプまではコックとポーターも付いてきてくれて私の荷物を持ってくれるという。空身登山は自分のプライドが許さないが、それが今の実力と悟り大名登山をさせてもらうことにする（三浦雄一郎さんみたいな気分だ）。

今回は核心部の 20 メートルくらいにロープを張っただけだったが、今回は前日に 100 メートル近くも張ってくれてあったので、電車ゴッコのお客さんのような気分だ。おまけに稜線に上がると、前日のうちにテントまで張ってくれてあり、至れり尽くせりである。本当はもっと山頂に近い方にテントを設営してもらいたかったのだが、テントを移動してくれとは言いつらく、この地点からでも皆は山頂往復しているのだからと思いついたが、これが思わぬ失敗に繋がってしまった。

ハイキャンプの高度はベースキャンプよりも約 700 メートル高い約 5500 メートルで

頂上までは約900の標高差である。今回はもう少し先にテントを設営したが、前回かかった高山病のようなアクシデントでもない限り、1日で十分に往復できる距離である。朝出発時の脈拍は68回/分だったのが、80までに増加はしているものの正常な範囲内ではあるし、特に高山病の自覚症状らしきものはない。強いて言えば、頭が心もちパワーとしているかなということと、用足しの回数が減っているくらいである。できるだけ水分補給に努めることにしよう。

ポーターがベースキャンプに戻ってもコックは戻らず夕食を作ってくれた。ハイキャンプではフリーズドライ食品と相場が決まっているのに、ベースキャンプ並みの食事が味わえるとは予想外だった。コックは寝袋も持参しているようなので、明日一緒に登頂するのかもしれない。

翌朝は天気も良く39年前のような高山病の症状もなく、登頂できない理由を探す方が難しかった（その時はそう思った）。出発してしばらくは小さいアップダウンはあるものの、概ね平坦な道が続いていく。途中何か所かクレバスがあるが、三人でロープで結びあっているため底まで落ちる心配はないし、クレバスを避けるために迂回しながら進んで行くので、体力的には助かる。だが後半戦に入って頂上に向かっての雪壁まじりの急な登りとなってくると、何度も休みを入れないと登り続けられなくなってくる。



ニューレークレスト最高到達点(6210メートル)
右後方の尖がったピークが山頂

ちょっとした雪壁を登りきると、稜線に出て初めて山頂が間近に見えてくる。ここからだと二時間余りらしいが、時間は4時を回っており、山頂到達は日没前後となるだろう。それから、長い道程を無事に戻ってこれるかどうかは自信がなかった。そこでガイドに登頂断念を伝え、写真を撮ってから下降を開始する。明るいうちは先ほど登ってきた道を降りていることはわかったのだが、暗闇に包まれてしまうと踏み跡を伝っていくガイドの

背中を追うだけで精一杯で、おまけに平坦地まで降りてしまっただけからは、高度によって現在地を確認することもできず、精神的な焦りも加わった疲労は極限に達したが、やがて高度はハイキャンプより、やや高い高度まで下がったのでハイキャンプまではもう少しの辛抱だと思ったその時に、ガイドが雪の斜面にスノーバーを打ち込んで、「ここから30メートルほど斜面を降りると、ハイキャンプに繋がる近道がある」という。半信半疑だったが下に降りて道とは云えない緩い斜面を横切っていくら行ってもハイキャンプに着かない。最後はスリップしそうな不安定な道を通ってハイキャンプにたどり着いたが、時間は2時前で全然近道ではなかった。何故そんな悪い道を近道だと偽って通らせたのか理由を尋ねても答えない。私の怒りも爆発して、明確な回答が得られなければ、エージェントの社長に報告するとまで思ったが、しばらくして気を取り直し、騒ぎを大きくして人間関係

を悪くするのは得策ではないので、私のわからない理由については詮索しないことにした。

今回はハイキャンプをもう少し前進させるか、出発時間を数時間早めれば登頂できたのではないかと思うが、(6年振り、ネパール初の)六千メートルラインを越えるという最低の目標は達成できたのでよしとしましょう。また39年ぶりのリベンジという点も、完全リベンジこそはできなかったが、前回進めなかったハイキャンプから先の道も頂上近くまで進むことができ、今回は高山病にかからなければ間違いなく登頂できたことを確認したことが収穫であると云えよう。